

藤原宮跡第24次発掘調査現地説明会資料

1978年10月28日

奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1. 調査の経過

藤原宮第24次調査は、藤原宮東面北門周辺における遺構の把握を目的とし、主として宮東大垣とそれに伴う外濠・内濠を確認することであった。調査は、1978年9月11日より開始し、同年12月終了予定である。調査地区は、東西約65m・南北約45mの範囲を対象とし、うち約2000㎡を発掘した。

2. 検出遺構

調査によって検出した遺構は、藤原宮期を中心に、それ以前と以後の3時期に区別することができる。

**藤原宮期の遺構** 宮東大垣と外濠・内濠、掘立柱建物3、掘立柱塼1、溝2、井戸2、土壇1がある。宮東大垣(SA175)は、発掘区の中央にあり、南北方向の掘立柱で15間分を検出した。柱間は約2.7m(9尺)で、いずれも東側へ柱を抜き取った痕跡がみられた。東外濠(SD170)は、SA175の東20.2m(心距離—以下同じ)にある幅約6mの溝であり、内濠(SD10)は、SA175の西11.8mにある幅2.4mの溝である。いずれもSA175と平行して流れる素掘の溝である。

SB01は、SD170の東にある東西2間・南北5間以上の掘立柱建物で、柱間は東西2.4m等間・南北約1.8m等間である。SB02は、SB01の東南にある東西2間・南北2間の東西棟掘立柱建物であり、建物方位は東で北へ偏している。SB03は、SB02の東南にある掘立柱建物で、今回はその一部を検出したにすぎない。SA04は、東西方向の掘立柱塼であり、柱間は2.0~3.0mである。SB01と重複している。

SD07は、SA175の東11.6mにある幅約0.8mの南北溝で、SA175をはさんでSD10とほぼ対称の位置にある。SD12は、南西から北東へ流れる幅0.5m前後の斜行溝であり、東はSD10に流れこむ。発掘区東端の井戸SE06及び西端の井戸SE13は、いずれも径約1.5mの円形掘形をもつ。SK05は、SB02の南に検出した円形の浅い土壇で、内部から銅鏡片が出土した。なお、これらの遺構はA・B2期の変遷がみられる(表参照)。

**藤原宮以前の遺構** 方形周溝1と溝2がある。SX11は、発掘区北端で検出した一辺約1.1mの方形周溝墓であり、四隅がほぼ方位を指す。周溝は幅約1.5m、深さ0.5mで、南隅部が途切れる。中央部を宮内濠SD10が通り、主体部は明確でない。SD08は、発掘区を南東から北西に走る幅2m前後の溝であり、SD09は逆に南西から北東へ走る幅1m前後の溝である。これらの遺構には、いずれも古墳時代初期の土器が伴っていた。

**藤原宮以後の遺構** 土壇1と配石遺構がある。SK14は東西4.5m、南北1.8mの長方形の土壇で、内部から黒色土器碗・皿類とともに土馬1点が出土した。SX15は、小石を組み上げて築いた小規模(径0.4m・深0.2m)の遺構であり、性格はさだかでない。内部から黒色土器が出土した。

3. 出土遺物

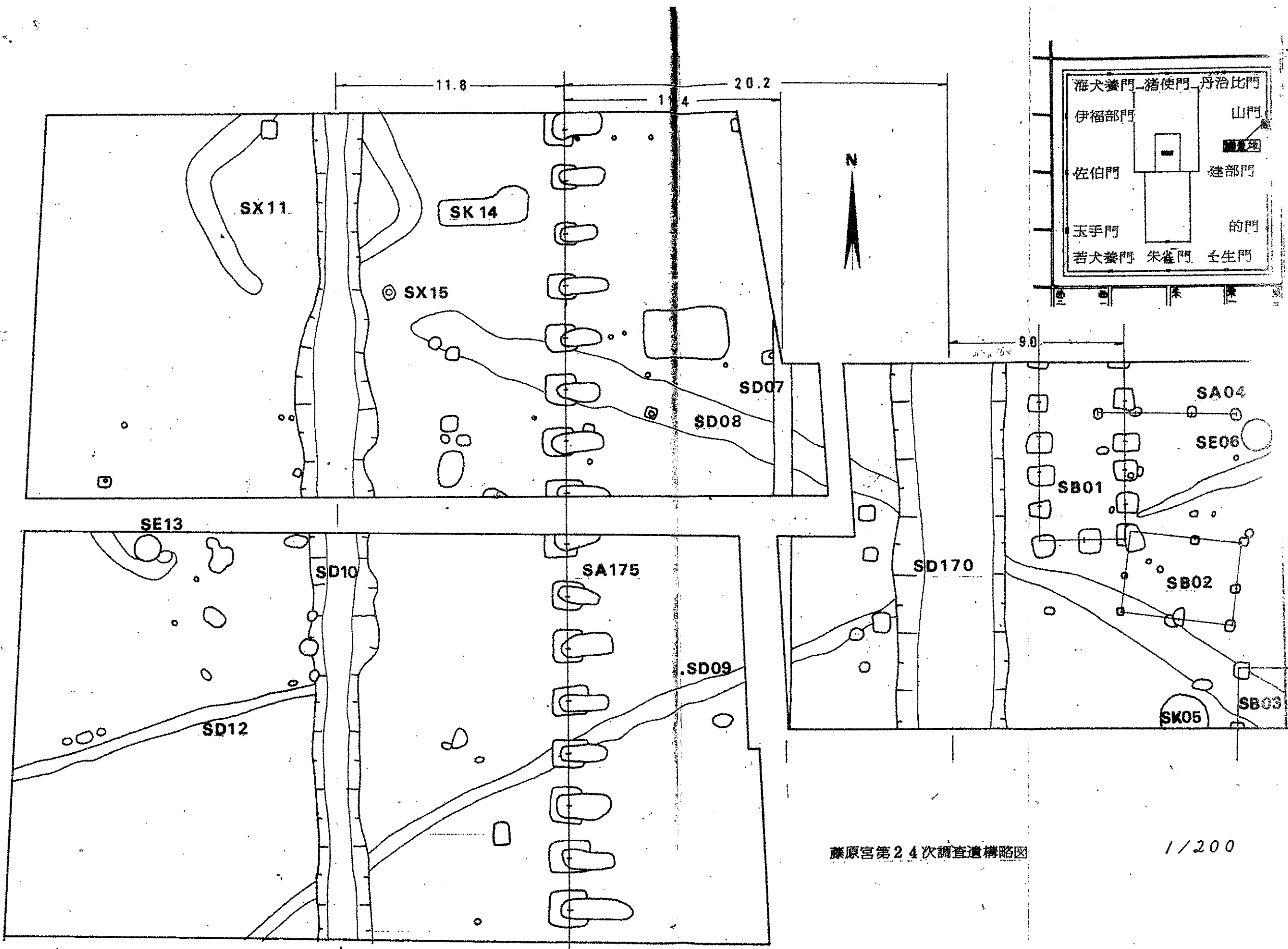
SD170及びSD10からは、多量の土器と瓦が出土した。いずれの溝も上層部分の発掘を終了した段階であり、今後の調査にまつところ大である。現状では、土師器・須恵器とも供膳形態のものが多数を占め、瓦類では、軒丸瓦6272・6279型式が、軒平瓦6646・6647型式がめだっている。この他に墨書土器、土馬、銅鏡、木簡、木製品などがある。

4. まとめ

調査の結果、宮東大垣とそれに伴う外濠・内濠は、従来の調査で確認されているものと同規模であり、内濠の内側15mほどは、空閑地であったことが明らかとなった。外濠の外で検出したSB01は、東面北門を警護する兵達が詰める「伏舎」の性格をもつものと考えられる。

検出遺構の時期別表

藤原以前	藤原宮期			藤原以後
	A期	B期	不明	
SX11	SB02 SE06	SA175 SB01	SB03	SK14
SX08	SA04 SE13	SD170 SD07		SX15
SX09	SK05	SD10 SD12		



藤原宮第24次調査遺構略図